第３２８回　令和８年１１月１２日（木）

「ロボットのオリンピックを見て」

　中国で開催されたロボットのオリンピックをニュースで観ました。中国の技術力の高さに驚かされましたし、正直「ここまで進歩したのか」とそのスピードに脅威を覚えました。

　ただ違和感もいくつかありました。１つはボクシングをしていたロボットです。技術を見せる意図があったのかと思いますが、相手を蹴ったり殴ったりする能力をロボットに覚えさせることは必要なのでしょうか。

　小説には「ロボット３原則」というのがあって、ロボットは絶対人間を傷つけてはいけないとされています。明らかに人を傷つけてしまう能力を持たせることは危険がないのでしょうか。戦場で武器がなくなって、銃で撃たれても襲ってくるロボットを想像すると空恐ろしくなります。

　ウサインボルトを上回る１００メートルの記録を出したロボットが報道されていました。単純にすごいと感じる自分と、ボルトと比べることに違和感を持つ自分がいました。

　ロボットは機械ですから、むしろ自動車のレースと比較するべきですよね。今はボルトの記録が色あせることはありませんが、やがてロボットが人間に近づいてきて、人間のような若者が走る姿を観たら、本当のオリンピックがつまらなく見えてしまうかもしれません。

　「人間を超える」ことがとても強調されています。そもそもＰＣだって電卓だって人間の能力は超えています。いくら氷をかき集めても冷凍庫の力には敵いませんが、それは当たり前ですよね。でもロボットやＡＩに人間が超えられることには一定の恐怖感があります。本能的に生存権が脅かされることを感じているのかもしれません。

　だからオリンピックのフィールドで機械が人間を超える様子をことさらに強調することに著しい違和感を覚えるのです。人間はライオンやクマと素手で戦おうとはしません。すでに結果がわかっているからです。ロボットやＡＩに対してそのような感情を抱くようになるのはそう遠い話ではないように思います。

　ＡＩと会話する人はその回答を疑わなくなってきています。知力でも体力でもＡＩやロボットに敵わない、従うのが正解だと思うことは人類の未来にとって良いことなのでしょうか。

　コースを外れて転倒し、火花を散らすロボットがとても痛々しく見えます。あと数年してそのような失敗がまったく見られなくなったとき、人間とロボットの関係はどのように変化するのでしょうか。